北星学園大学大学院文学研究科 北星学園大学大学院論集第４号（通巻第16号）（2013年）・抜粋

オーナーと飼い犬の相互の愛着度が多頭飼育のイヌの独占的行動に与える影響

米　谷　さくら

オーナーと飼い犬の相互の愛着度が多頭飼育のイヌの独占的行動に与える影響

Relationship between group-breeding dogs' monopolistic behavior to the owner and mutual attachment of the owner and the dogs

米　谷　さくら

目次

1．はじめに
2．ヤキモチ実験
3．愛着度調査
4．結果
5．考察

1.【はじめに】

現代の日本ではペットを飼う家庭が増加し、イヌとネコの飼育頭数は、1994年の15,223,000頭（外猫も含む）から2011年は21,486,000頭と増加している（一般社団法人ペットフード協会、2009，2011）。この中で、ペットは家族の一員であるという考え方を持つ家庭が広まりつつあり（松田，2007）、最近では、イヌやネコなど家庭で飼育される動物をペットと呼ぶのではなく、「コンパニオン・アニマル」と呼ぶようになりつつある（養老・的場，2008）。コンパニオン・アニマルとは、飼育される動物をヒトが生活していく上での伴侶として捉え、人と密接な関係を築いていく動物と捉える言葉である。

コンパニオン・アニマルを飼育する家庭が増加するとともに、コンパニオン・アニマルによる問題行動も目立つようになってきた。イヌを飼うオーナーの中では、飼い犬が問題行動を起こしたので飼育を放棄したという事例はいくつも見られ、飼い犬が起こす問題行動にオーナーが目を向けない事が飼育放棄に至る原因の一つだと言われる（太田，2010）。飼育を放棄されたイヌたちの多くは殺処分、または一般譲渡される。2010年の年間殺処分頭数は53,473頭で、2008年の84,264頭から減少しているものの、多くのイヌが殺処分されている。一方、一般譲渡数は、2008年には16,097頭、2009年には17,374頭、2010年には17,675頭と少しずつ増加している（地球生物会議 ALIVE，2010）。殺処分される犬の頭数を少しでも減らし、イヌの問題行動を予防して一般譲渡数を増やすには、オーナーが飼育放棄に繋がる問題行動の原因を理解し、解決する方法をしっかりと学ぶ必要がある。

イヌの問題行動には様々なものがあり、攻撃的な行動、不適切な排泄や、恐怖／不安が原因となって生じるものなどがあげられる。イヌで見られる問題行動の１つに、他のイヌやヒトと会う場面で他のイヌやヒトに噛み付く攻撃行動がある。攻撃行動は優位性攻撃行動や恐怖性攻撃行動、家庭内での同種間攻撃行動といった様々な行動に分類される。中でも家庭内での同種間攻撃行動は、犬種による遺伝子的傾向、イヌ同士の間の優劣順位不足もしくは欠如、オーナーの愛情を求めるイヌ同士の競合により引き起こされる（森・武内，2005）。また、オーナーの不在場面で見られる無駄吠え／遠吠え、破壊的活動などの行動が生じる分離不安も、問題行動の１つで

ある。分離不安は、オーナーのライフスタイルや態度の変化が原因となって生じる（森・武内，2005）。

この他の問題行動として、イヌの嫉妬や独占欲が原因で起こる問題行動も存在する。イヌの嫉妬や独占欲による問題行動は、オーナーが家庭で飼育していた飼い犬に加え新しいペット（コンパニオン・アニマル以外の動物も含む）を飼い始めた、オーナーの家庭に新しく子どもが産まれたといった状況で、もとからいた飼い犬が新しいペットまたは産まれた子どもに対して攻撃的な行動をとるものを指す（水越，2007）。この他にも、複数の飼い犬が飼育されている多頭飼育環境では、ある飼い犬に対してだけオーナーが関心を向けた時に、関心が向けられなかった飼い犬がオーナーの関心が向けられた飼い犬に対して攻撃的な行動を示す、というものもこれに含まれる（平岩，1976）。また常同的な問題行動として、オーナーの関心を求める行動があり、オーナーの関心を得ようと跛行を示したり尻尾を追い回すなどの常同的な行動を示すこともある（森・武内，2005）。これらの行動は、新しくやってきたペットや子ども、もしくは別の飼い犬にオーナーを奪われてしまうのではないか、という飼い犬の嫉妬やオーナーの関心を独占したいという独占欲が原因で起こるとされる。

独占的行動は、前述した3つの例のように、オーナーの態度がそれまでの飼い犬に対する態度とは異なるような変化、あるいはオーナーの関心が何かに偏った際に生じる。米谷（2010）は、多頭飼育環境の飼い犬の独占的行動について、独占的行動が向けられる対象と独占的行動が生起する状況について質問紙調査と実験を行った。その結果、多頭飼育されている飼い犬では、同居犬にオーナーが関心を傾けた時、飼い犬がオーナーに対して自身に関心を向けてもらおうとする「かまって行動」と、関心を向けられた同居犬に対してオーナーにかまわれることを妨害する「攻撃行動」の2種類の独占的行動が見られることを示した。この結果から、多頭飼育環境で飼い犬に独占的行動が生起する原因は、オーナーと飼い犬が相互に関心を向け合う日常的な関係が崩れることだと推測された。すなわち、飼い犬の独占的行動の生起には、オーナーとの日常的な関係が大きく影響するのではないか、と考えられた。

しかしながら米谷（2010）は、オーナーと飼い犬との日常的な関係が独占的行動にどのような影響しているかについて明らかにしなかった。そのため本研究では、オーナーと飼い犬との日常的な関係が独占的行動にどのような影響を与えるか確かめることにした。

本研究で扱う独占的行動とは、米谷（2010）の分類にしたがい、「かまって行動」と「攻撃行動」を指すものとした。また先述した独占的行動である「オーナーの関心を求める行動」という問題行動の原因は、オーナーの愛情過多や関心不足にあると言われている（森・武内，2005）ため、本研究ではヒトとイヌとの日常的な関係を愛着度という側面からとらえることにした。

愛着度とは、オーナーの日常的な飼い犬への接し方、あるいは飼い犬のオーナーに対する日常的な態度により測定することにした。オーナーは飼い犬のことが好きで可愛がって育てている。飼い犬はオーナーにとても懐いているといったような、お互いの心理的距離やそれを表現する態度の程度を測り、これを愛着度とした。オーナーから飼い犬への愛着度、並びに飼い犬からオーナーへの愛着度の両方が高いということは、日常的にオーナーが飼い犬をとても可愛がっており、飼い犬もオーナーと一緒にいられるときは傍にいる、といった、いつもお互いのことを気にかけている関係だと考えられる。一方オーナーから飼い犬への愛着度と飼い犬からオーナーへの愛着度の両方が低いということは、オーナー

が飼い犬だけを特に気にするのではなく他のモノや動物に対しても飼い犬と同様な扱いをしており、また飼い犬もオーナーの行動に対して無関心であり、オーナーと飼い犬共にお互いに対してあまり執着がない関係だと考えられる。

この愛着度と独占的行動の関係を検討するため、本研究ではまず、実験場面を用意し飼い犬が示す独占的行動を記録した。同時に、オーナーの飼い犬に対する考えや飼い犬のオーナーに対する態度をたずねる質問紙への回答結果から、オーナーと飼い犬双方の愛着度の程度を測定した。その上で、飼い犬が示した独占的行動の生起量とオーナーと飼い犬双方の愛着度の程度を比較し、両者の関係について探ることにした。

本研究では、飼い犬の独占的行動を測定するヤキモチ実験、およびオーナーから飼い犬への愛着度と飼い犬からオーナーへの愛着度のそれぞれを検討する質問紙調査を行った。ヤキモチ実験は、米谷（2010）で得られた結果に新たな実験結果を加え、生起された独占的行動を行動レパートリーに分類し、各行動レパートリーの生起回数を記録した。質問紙調査では、日常生活におけるオーナーと飼い犬のお互いの関係に着目し、オーナーの飼い犬に対する愛着度と飼い犬のオーナーに対する愛着度を測定した。その後、ヤキモチ実験の結果と質問紙調査の結果から、オーナーから飼い犬への愛着度、飼い犬からオーナーへの愛着度のそれぞれが、飼い犬の独占的行動の生起回数や行動レパートリーの種類数に影響を与えているか検討した。オーナーの飼い犬に対する愛着度が高い場合、オーナーは日常的に飼い犬を無視することはないと考えられる。そのためヤキモチ実験場面では、オーナーが飼い犬を無視することにより、独占的行動が多く生起されると考えた。同様に、飼い犬のオーナーに対する愛着度が高い場合にも、飼い犬は自身を無視するオーナーの関心を取り戻そうとするため、ヤキモチ実験場面においてオーナーの注意を引こうとする「かまって行動」等の独占的行動が多く生起されると考えた。

2.【ヤキモチ実験】

ヤキモチ実験は、米谷（2010）で行われたヤキモチ実験に、新たな被験体を加えて行った。実験は多頭飼育場面において飼い犬が2頭、あるいは3頭とオーナーで行った。一方の飼い犬が被験体となり、同居犬であるもう一方の飼い犬は、被験体の独占的行動の誘因（被験体が独占的行動を引き起こす誘因）となった。

ヤキモチ実験には、米谷（2010）の質問紙調査において多頭飼育場面で独占的行動が多く見られた。①オーナーが同居犬の名前を呼ぶ、②オーナーが同居犬をかまう、③オーナーが同居犬を連れていなくなる、という同居犬が独占的行動の誘因となる3場面を用意した。これらの場面は全て、オーナーが被験体ではない同居犬のみに関心を持つ、あるいは同居犬のみをかまい、被験体となった飼い犬が無視される場面だった。

3つの場面は、飼い犬の独占的行動を生起させる程度が低・中・高の順となるよう設定した。最初の場面①「オーナーが被験体ではない同居犬の名前を呼ぶ」は、日常的に多々ある場面だと考えられることから、独占的行動の生起頻度は3つの場面の中で1番低いと思われた。続く場面②「オーナーが被験体ではなく同居犬をかまう」は、多頭飼育の家庭において一方の飼い犬のみをかまうことはあまりない行動であると考えられるため、独占的行動の生起頻度は3つの場面の中で中程度だと思われた。最後の場面③「オーナーが被験体ではなく同居犬を連れていなくなる」は、多頭飼育の家庭ではほとんどみられないと考えられる行動であるため、3つの場面のうち

独占的行動が１番多く見られるのではないかと思われた。

方法

被験体：多頭飼いのイヌ（*Canis lupus familiaris*）11頭が実験に参加した。それぞれの被験体の内訳はオーナー別に表１にまとめた。
実験環境：オーナーの自宅のリビングと玄関（またはキッチン）で行った。
実験条件：場面①から③は次のように用意した。以下では、独占的行動の記録対象の被験体となった飼い犬をＡとし、Ａを邪魔し独占的行動を生起させる「誘因」となった同居犬をＢと表記した。

表1. オーナー別被験体の内訳

オーナー	被験体番号	犬種	年齢	性別
A	1	ミニチュア・ダックスフンド	7y	F
	2	ミニチュア・ダックスフンド	10y	M
	3	ミニチュア・ダックスフンド	5y	M
B	4	雑種	6y	F
	5	雑種	9y	F
C	6	ウエスト・ホワイト・テリア	10y	M
	7	ゴールデン・レトリバー	11y	M
D	8	パピヨン	8y	F
	9	パピヨン	6y	F
E	10	チワワ	7y	M
	11	パピヨン	11y	F

・場面①は、オーナーがＡとＢと一緒にいる部屋の中で行った。オーナーはＡとＢから少し離れたところにおり、そこでＢの名前を呼んだ。「Ｂおいで。」などの掛け声も有りとし、名前を呼ぶ間隔は約10秒とした。オーナーが名前を呼ぶ行為はＡとＢどちらか一方もしくは両方が来るまで行い、両方ともこなかった場合には１分間この行為を続けさせた。

Ｂの名前を呼びＢが来た場合は次の場面②へ移行した。Ｂの名前を呼んだ時にＡがオーナーのところへ来た場合は、オーナーはＡを無視してＢのところへ行き、Ｂを抱きＡから少し離れたところへ移動してから次の場面②へ移行した。Ｂの名前を呼びＡとＢの両方がオーナーのところへ来た場合は、オーナーはＡを無視しＢだけを抱きＡから少し離れたところへ連れていき場面②へと移行した。ＢをＡから離れたところに連れていってもＡが付いてきた場合にはその場で場面②へ移行し、その間、Ａのことを無視し続けた。
・場面②は、場面①に引き続きオーナーがＡとＢと一緒にいる部屋の中で行った。オーナーはＢのところへ行き、Ｂと遊んだ。遊ぶ行為には、じゃれる・撫でる・道具を使って遊ぶ・「イイコだね」などの声をかけるという行為が含まれた。場面②の継続時間は30秒から１分とし、オーナーはその間Ａを無視し続けた。

場面②は場面①の進行結果によって遊び行為を始める場所が異なった。場面①でＢがオーナーのもとに来た場合はその場で場面②を実施した。Ａがオーナーの元へ来た場合は、オーナーがＢのところへ行きその場で場面②を実施した。ＡとＢの両方がオーナーのところへ来た場合は、オーナーはＡのことを無視してＢだけを抱き、Ａから少し離れた場所にＢを連れていき場面②を実施した。ＢをＡから離れたところに連れていってもＡが付いてきた場合にはその場で場面②を実施し、その間Ａのことは無視し続けた。場面②で遊び行為を終えた後、そのまま場面③へと移行した。
・場面③では、場面①、②を行った部屋からオーナーがＢを抱き、Ａから姿が見えなくなる場所（玄関またはキッチン）へ移動した。オーナーは玄関でＢを抱いた状態のまま「Ｂはいい子だね」「可愛い」などの声をかけた。オーナーはこの間Ａのことを無視し続けた。Ｂを抱いている時間は30秒から１分とした。この時、Ａが玄関に行くことができるように、玄関へ通じる扉は開けておいた。

手続き

実験は、被験体となったイヌを多頭飼育で飼育している家庭に訪問し実施した。まずオーナーと家族に実験の説明および手続きを示し

た実験説明書を配布し、口頭で実験の趣旨と内容をオーナーに説明した。この準備の間に、実験者は飼い犬とのあいさつ等を済ませ、実験者の訪問によって飼い犬に生じる未知の者に対する反応を収め、できるだけ日常的な状況となるよう心がけた。

実験は、場面①から場面③までを通しておこなうことを1試行とした。1試行の所要時間は約3分間だった。被験体1頭につき1試行行った後、約15分のインターバルを置いてから最初に被験体となった飼い犬と被験体を邪魔する誘因役となった飼い犬の役割（AとB）を入れ替え、2試行目を行った。2試行目も約3分で終了した。

実験の試行中は、被験体となった飼い犬をオーナーが無視し続けることになったため、各試行の終了後、被験体となった飼い犬を抱き上げたり声をかけるといったオーナーからの行動によって、被験体Aのケアを行った。

記録・行動解析方法

被験体AとB、およびオーナーの行動は、ビデオカメラ（Victor社製、GZ-HD300-S）を2台使用し撮影された。1台目はリビング（場面①と場面②を記録）に、2台目は玄関または台所（場面③を記録）に設置され撮影・記録された。実験で記録した映像は行動コーディングシステム（DKH社製Beco）を用い、独占的行動が生起しているか解析した。独占的行動の解析は、実験者1人が行った。

3.【愛着度調査】

方法

調査期間：2011年7月から8月にかけて調査を実施した。

調査対象：米谷（2010）のヤキモチ実験に参加した被験体のオーナー4名（女性）と新たにヤキモチ実験に参加した被験体のオーナー1名（女性）の全5名であった。

質問紙：イヌを多頭飼育しているオーナーに対する質問紙は、全飼い犬についての質問紙（全飼い犬質問紙）と、各飼い犬についての質問紙（個別飼い犬質問紙）の2部構成とした。

「全飼い犬質問紙」は、フェイスシート、オーナーと飼い犬と同居している家族について尋ねる項目（2項目）、2頭間の関係について尋ねる項目（3項目）、2頭間の順位について尋ねる項目（7項目）で構成された。

「個別飼い犬質問紙」では、飼い犬の基本的な情報（年齢・性別犬種等）と飼育環境（9項目）、飼い犬の性格（攻撃性／分離不安）（14項目）、オーナーから飼い犬への愛着度、飼い犬からオーナーへの愛着度についての質問項目（11項目）を設けた。この質問紙では回答中にオーナーが自身の飼い犬のどの個体について回答しているのかわからなくなることがないよう、ページごとに飼い犬の名前を記入させた。

飼い犬の性格は、攻撃性を測るためにDog Behavior Inventory（Coren，2006）の支配性／攻撃性尺度を使用し、全10項目を“全くしない（1）”～“よくする（5）”の5段階で評定させた。分離不安については4項目について“全くしない（1）”～“よくする（4）”、“わからない（5）”の5段階で評定させた。飼い犬の独占的行動における「攻撃行動」が飼い犬の性格によって影響されているのかを調査するべく設けた。それぞれの質問項目は付録に示した。

オーナーから飼い犬への愛着度は、部屋でオーナーがくつろいでいる際の飼い犬との接し方について6つの質問項目を設け、オーナーが取り得る5～6個の行動項目の中から当てはまるものを1つ選ばせた。飼い犬からオーナーへの愛着度は、オーナーが部屋でのんびりしている際の飼い犬の行動について5つの質問項目を用意し、飼い犬が取り得る5～8個の行動項目の中から当てはまるものを1つ

表2. 実験中に見られた行動

分類	行動	内容
かまって行動	オーナーに手をかける	Aがオーナーの体（足や腕など）に自身の手を乗せる。又は1度だけひっかく行動。
	顔に顔を近づける	Aがオーナーの顔に自身の顔を近づける、又は近づけようとする行動。
	オーナーに吠える	Aがオーナーに対して吠える行動。
	オーナーを掘る	Aがオーナーの体（足や腕など）を地面を掘るような動作で連続してひっかく行動。
	鼻を鳴らす	Aがクンクンと高い声を出す行動。
攻撃行動	Bに吠える	AがBに対して吠える行動。
	Bに噛み付く	AがBの体（首など）に噛み付く行動。
	Bに唸る	AがBに対して唸り声を上げる行動。
	Bに乗りかかる	AがBの体（背中など）に自身の体を乗せ、乗りかかる又は乗りかかろうとする行動。
その他	オーナーを注視	Aがオーナーを注視する行動。
	注視＋しっぽ	Aがオーナーをしっぽを振りながら注視する行動。
	Bを注視	AがBを注視する行動。
	Bの匂いを嗅ぐ	AがBの体（お尻など）の匂いを嗅ぐ行動。
	オーナーにマウンティング	オーナーの体に捕まって、自身の腰を振る行動。

表3. 実験全体で見られたかまって行動の生起回数（／分）

被験体番号	手をかける	顔に顔を近づける	Oに吠える	Oを掘る	鼻を鳴らす
1	13	−	−	−	−
2	5.4	−	−	−	−
3	18	−	−	−	12
5	−	−	32	−	−
6	10.8	6	−	3	−
8	8	−	−	−	−
9	4.7	14.2	−	−	−
10	2.4	1.2	−	−	−
11	−	−	28.8	−	−

表4. 実験全体で見られた攻撃行動の生起回数（／分）

被験体番号	Bに吠える	Bに咬みつく	Bに乗りかかる	Bに唸る
4	1.8	25	7.8	−
5	−	−	3	−
10	55.8	−	4.8	3.6
11	−	−	5.4	

選ばせた。それぞれの質問項目は付録に示した。

手続き

質問紙への回答は、オーナーに直接手渡し回答を求めたもの、質問紙を郵送したもの、FAXで質問紙を送信したものの3つの手法で行った。

独占的行動と愛着度との関係

飼い犬の独占的行動と愛着度との関係を明らかにするため、ヤキモチ実験で見られた独占的行動のカテゴリ別の生起回数および行動レパートリーの種類数と、質問紙調査におけるオーナーから飼い犬への愛着度の得点、および飼い犬からオーナーへの愛着度の得点のそれぞれについて比較した。また飼い犬の行動特性の攻撃性と実験で見られた独占的行動の生起回数を合わせ、両者の関係についても検討した。

4.【結果】

ヤキモチ実験

解析方法：　被験体となった飼い犬のヤキモチ実験中に見られた行動を解析するため、まず被験体（A）となった飼い犬の行動を解析者の主観的判断に基づいて、14種類の行動レパートリーに分類した。分類の対象となった行動は、記録された映像内で見られた飼い犬の行動のうち、オーナーもしくは独占的行動の「誘因」となった同居犬（B）に向けられて行われた、と判断できるものだった。

14種類の行動レパートリーは、「かまって行動」、「攻撃行動」、「その他」のカテゴリに分類された。「かまって行動」には、オーナーに対して被験体が行った5種類の行動レパートリーが分類された。「攻撃行動」には、独占的行動の誘因であるBに対して被験体が行った4種類の行動レパートリーが分類された。「その他」のカテゴリには、オーナーやBに対して被験体が行った行動のうち「かまって行動」にも「攻撃行動」にも分類されなかった5種類の行動レパートリーが分類されたが、このカテゴリに含まれる行動レパートリーは、これ以降の解析対象からは除外された。

これらの行動レパートリーの他に、被験体は実験者に対する行動（実験者に吠える、実験者に注視する等）や、オーナーもしくはB以外に向けた行動（外に向かって吠える、外を注視する等）、歩き回る、キョロキョロと周りを見渡す、椅子に座る等の行動が生起されたが、それらの行動は記録しなかった。

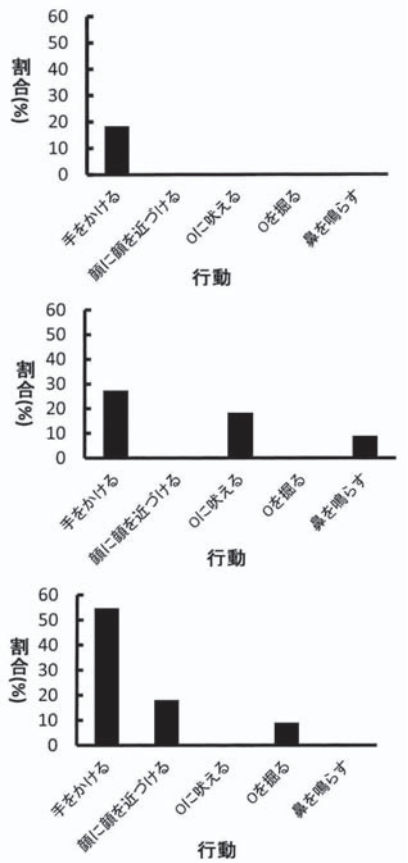

図１．実験中にかまって行動を生起させた被験体の割合
上の図は場面１でかまって行動を生起させた被験体の割合を、中央の図は場面２でかまって行動を生起させた被験体の割合を、下の図は場面３でかまって行動を生起させた被験体の割合を示している。

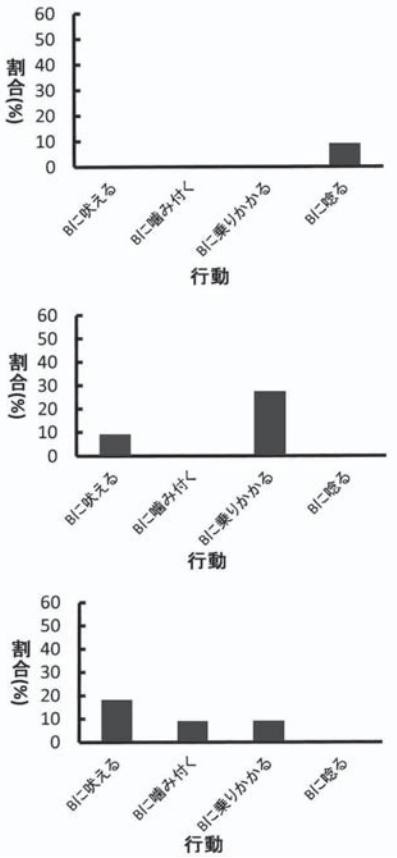

図２．実験中に攻撃行動を生起させた被験体の割合
上の図は場面１で攻撃行動を生起させた被験体の割合を、中央の図は場面２で攻撃行動を生起させた被験体の割合を、下の図は場面３で攻撃行動を生起させた被験体の割合を示している。

表２に、「かまって行動」、「攻撃行動」、「その他」のカテゴリ別に、14種類の行動レパートリーとその具体的な内容を示した。

生起回数：　ヤキモチ実験全体で生起した独占的行動について、それぞれの行動レパートリーごとに１分当たりの生起回数を被験体別に求めた。各行動レパートリーの生起回数を「かまって行動」と「攻撃行動」の各カテゴリ別に表３と表４に示した。当該の行動レパートリーを生起させなかった被験体は、表に記載しなかった。

独占的行動を生起させた被験体の割合

図１には場面①～③のそれぞれの場面で「かまって行動」を生起させた被験体の割合を示した。縦軸は「かまって行動」を生起させた被験体の割合を示し、横軸は「かまって行動」に分類された５種類の行動レパートリーを示している。

場面①ではほとんどの行動が生起せず、ただ１つ見られた「手をかける」も生起させた被験体の割合は低かった（図１の上）。それに対し場面②では「手をかける」を半数の被験体が生起させた。その他にも「顔に顔を近づける」「オーナーを掘る」が生起されるようになった（図１の中）。場面③では場面①から生起されていた「手をかける」以外に「オーナーに吠える」「鼻をならす」といっ

たオーナーの気をひこうとする行動を生起する被験体が見られるようになった（図１の下）。

図２には「攻撃行動」を生起させた被験体の割合を場面別に示した。縦軸は「攻撃行動」を生起させた被験体の割合を示し、横軸は「攻撃行動」に分類された４種類の行動レパートリーを示している。場面①ではほとんどの行動が生起されなかった。ただ１つ見られた「Ｂに唸る」も生起させた被験体の割合は低かった（図２の上）。場面②では「Ｂに乗りかかる」「Ｂに吠える」が生起されるようになり、「Ｂに乗りかかる」は３分の１の被験体で生起した（図２の中）。場面③では「Ｂに唸る」以外の行動レパートリーが生起され、「Ｂに吠える」を生起させた被験体が多かった一方で、場面②で１番高かった「Ｂに乗りかかる」を生起した被験体は場面③では少なくなった（図２の下）。

質問紙調査

分析方法：　オーナーから飼い犬への愛着度と、飼い犬からオーナーへの愛着度は、各質問項目に対して選択された回答項目を High、Middle、Low の３つに分類し、High を３点、Middle を２点、Low を１点として集計し得点化した。

オーナーから飼い犬への愛着度では、High に分類された回答項目はオーナーが飼い犬に頻繁に接するもの、Middle に分類された回答項目はオーナーが飼い犬に頻繁ではないがある程度接するもの、Low に分類された回答項目はオーナーが飼い犬にほぼ接しないものとした。

飼い犬からオーナーへの愛着度では、High に分類された回答項目は飼い犬がオーナーに頻繁に接するもの、Middle に分類された回答項目は飼い犬がオーナーに頻繁ではないがある程度接するもの、Low に分類された回答項目は飼い犬がオーナーにほぼ接しないもの、とした。

飼い犬の性格特性の攻撃性は“まったくしない”の回答項目を１点、“いつもする”の回答項目を５点として集計した。最後の質問項目のみ逆転項目とした。

双方の愛着度得点

オーナーから飼い犬への愛着、飼い犬からオーナーへの愛着、飼い犬の攻撃性についての得点を表５にまとめた。

オーナーから飼い犬への愛着度については、得点の最大値が18点、最小値が６点だったため、９点よりも高い得点であればオーナーからの愛着度が高いものとした。その結果、すべてのオーナーのオーナーから飼い犬への愛着度が高いと判断された。

飼い犬からオーナーへの愛着度については、最大値が15点、最小値が５点となるため、10点よりも高い得点であれば飼い犬からオーナーへの愛着度が高いものとした。その結果、飼い犬からオーナーへの愛着度には個体差が見られた。飼い犬からの愛着度が高いのは被験体番号１、３、８、10番の飼い犬であり、被験体番号10番の飼い犬は愛着度得点が12点、その他の飼い犬はみな愛着度得点が11点であった。１番愛着度が低い被験体番号は４、５番の飼い犬で両者とも愛着度得点は６点であった。

表5. オーナーから飼い犬へ、飼い犬からオーナーへの愛着得点と攻撃性

オーナー	被験体番号	オーナーから飼い犬への愛着	飼い犬からオーナーへの愛着	攻撃性
A	1	15	11	29
	2	13	9	36
	3	15	11	23
B	4	16	6	17
	5	16	6	17
C	6	16	8	24
	7	16	7	20
D	8	13	9	27
	9	14	12	25
E	10	13	9	17
	11	10	11	32

愛着度と独占的行動

オーナーと飼い犬の双方の愛着度並びに飼い犬の攻撃性と、独占的行動との関係は次のように検討した。質問紙調査の結果から得られた飼い犬からオーナーへの愛着度、オーナーから飼い犬への愛着度、飼い犬の攻撃性のそれぞれの得点と、「かまって行動」「攻撃行動」別の生起回数や行動レパートリーの種類数とを比較した。この時、オーナーから飼い犬への愛着得点はどのオーナーでも高かったため、オーナーから飼い犬への愛着得点との関係は検討しなかった。

ヤキモチ実験全体において生起した独占的行動のカテゴリ別の全生起回数と、質問紙調査における飼い犬からオーナーへの愛着度の関係を図３に示した。

飼い犬からオーナーへの愛着度が高い被験体番号１、３、９、11の４頭では、独占的行動の生起回数が多い被験体もいるが、低い被験体も見られた。さらに、愛着度が低い被験体番号４、５の２頭では愛着度が高い９番の被験体よりも独占的行動の生起回数が多かった。これらの被験体の中で一番多く独占的行動を生起させたのは10番の被験体で、愛着度は９点だった。逆に７番の被験体は独占的行動を全く見せず、この被験体の愛着度は７点だった。

独占的行動のカテゴリ別の生起回数と飼い犬からオーナーへの愛着度との関係にしたがって独占的行動と愛着度の関わりを評価したが、生起回数だけではそれぞれの独占的行動の質が評価されていない可能性があった。すなわち、今回の実験で計測された１回の「オーナー

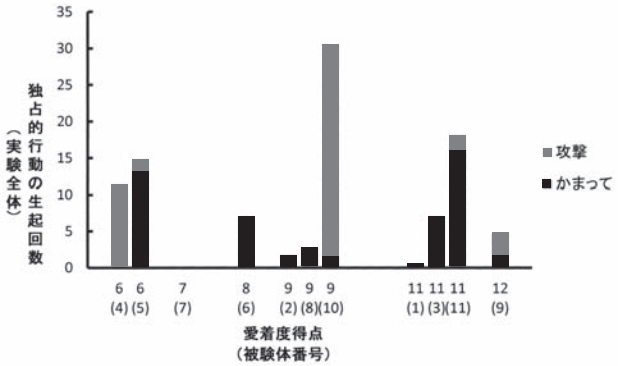

図３．独占的行動の生起回数（カテゴリ別）と飼い犬の愛着度得点の関係

縦軸には実験全体で生じた「かまって行動」と「攻撃行動」のそれぞれのカテゴリに属する各行動レパートリーの生起回数の合計を、横軸には各飼い犬が示した飼い犬からオーナーへの愛着度得点と被験体番号（括弧内）を得点の高い順に示した。

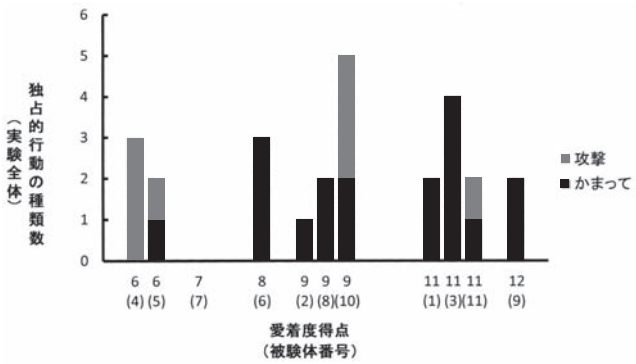

図４．生起した行動レパートリーの種類数（カテゴリ別）と飼い犬の愛着得点の関係

実験全体で生じた「かまって行動」と「攻撃行動」のそれぞれのカテゴリに含まれる行動レパートリーの種類数を縦軸に示し、横軸には飼い犬からオーナーへの愛着度得点と、被験体番号（括弧内）の得点の高い順に示した。

に手をかける」と１回の「鼻を鳴らす」を、同じ質の物として扱ってよいか明確ではない。そのため、「かまって行動」と「攻撃行動」の両カテゴリに分類された行動レパートリーの種類数と、飼い犬からオーナーへの愛着得点の関係をカテゴリ別に検討した。

図４には、飼い犬の独占的行動のカテゴリ別での行動レパートリーの種類数と飼い犬からオーナーへの愛着得点の関係を示した。

飼い犬からオーナーへの愛着得点が高い４頭では、独占的行動の中でも「かまって行動」が多く生起された。特に、愛着得点が１番高い９番の被験体では「かまって行動」のみが生起された。逆に、飼い犬からオーナーへの愛着得点が低いと「攻撃行動」が生起される傾向があり、４番の被験体では「攻撃行動」のみが生起された。これらの結果から、飼い犬のオーナーに対する愛着度が高い飼い犬は「かまって行動」を示す傾向が見られた。

図５には質問紙調査が得られた飼い犬の攻撃性と、ヤキモチ実験で生起された「攻撃行動」の生起回数の関係を示した。

この中で、実験全体で「攻撃行動」を生起させた４頭の被験体のうち３頭は、被験体の中でも最も攻撃性が低い３頭であった。したがって、質問紙調査で得られた飼い犬の攻撃性と独占的行動としてとらえられる攻撃行動の生起回数には関係がないと考えられる。

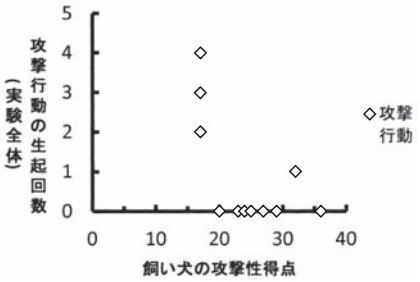

図５．飼い犬の攻撃性と攻撃行動の生起回数の関係
縦軸には実験全体の攻撃行動の生起回数を、横軸には飼い犬の攻撃性得点を示した。

5.【考察】

本研究では、オーナーと飼い犬との日常的な関係が飼い犬の独占的行動に与える影響について検討するため、飼い犬の独占的行動を測るヤキモチ実験と、オーナー及び飼い犬の愛着度を測る質問紙調査を実施した。

ヤキモチ実験では、飼い犬が生起した独占的行動を、米谷（2010）にしたがい独占的行動の誘因となった飼い犬に対する「攻撃行動」とオーナーに対する「かまって行動」の２種類のカテゴリに分けて解析した結果、「かまって行動」を生起しやすい飼い犬、そしてどちらも生起する飼い犬が見られた。

質問紙調査では、オーナーから飼い犬への愛着度が全てのオーナーで高いのに対し、飼い犬からオーナーへの愛着度には個体差があった。

ヤキモチ実験と質問紙調査の結果に基づき独占的行動の生起と愛着度との関係を検討したところ、オーナーから飼い犬への愛着度と飼い犬からオーナーへの愛着度は独占的行動の生起回数には影響を与えていないことが明らかになった。しかし飼い犬からオーナーへの愛着度の高さによって、ヤキモチ実験で生起させた独占的行動のカテゴリが偏る傾向が見られた。これは飼い犬からオーナーへの愛着度が高ければオーナーに対する「かまって行動」カテゴリに属する行動レパートリーが生起し、飼い犬からオーナーへの愛着度が低ければ独占的行動の誘因となった飼い犬に対する「攻撃行動」カテゴリに属する行動レパートリーが生起することが多いというものだった。オーナーに対する愛着度が高い飼い犬が多くの「かまって行動」カテゴリに属する行動レパートリーを見せたということは、飼い犬が様々な手段でオーナーの気を引こうとしていたのではないか、ということが推測される。このことから、飼い犬がオーナーへの愛着度が独占的行動に影響を与える可能性が示唆された。

以上の結果から、飼い犬からオーナーへの愛着度が高くヤキモチ実験で「かまって行動」を生起した飼い犬は、日常的にオーナーと頻繁に関わりオーナーに対する執着が高いのではないかと考えられる。このような日常的な関係において、オーナーの関心が同居犬に向けられた場合、自身への関心を取り戻すために同居犬ではなくオーナーに対し「かまって行動」を生起させるのではないかと考えられる。一方で、飼い犬からオーナーへの愛着度が低くヤキモチ実験で「攻撃行動」を生起した飼い犬は、オーナーと日常的な関わりはあるものの、オーナーの行動などを気にせず、オーナーに対する執着があまり高くないと考えられる。オーナーの行動への関心が低く、オーナーへの執着が低い場合、オーナーが実験中に自身に関心を向けていない時にはオーナーに対して行動を起こして関心を向けてもらおうとはしない。そのためオーナーに関心を持たれる必要性はないが、同居犬のみがオーナーにかまわれ優遇されているのは不平等であると感じ、同居犬に対して「攻撃行動」を生起させるのではないかと考えられる。

同時に、「攻撃行動」を生起させた飼い犬の攻撃性は高くない（図５）ことから、独占的行動に見られる「攻撃行動」は飼い犬の性格特性にかかわらず生起し、ヤキモチ実験場面のようなオーナーが同居犬のみをかまうといった状況下において、嫉妬や独占欲が原因となって生起される可能性が高いと考えられた。

ところでヤキモチ実験では、場面ごとに独占的行動の生起回数や生起された行動レパートリーが異なった。これは場面ごとのオーナーの行動の変化に対する反応として生じたのではなく、オーナーが長時間飼い犬へ関心を向けなかったことにより生じた可能性も考えられる。この点は、オーナーから長時間関心を向けられない状況に飼い犬をおいた時、飼い犬の行動にどのような差異が生じるか検証することで明らかにできると考える。

質問紙調査において、飼い犬からオーナーへの愛着度は個体差が見られたが、オーナーから飼い犬への愛着度にはオーナーごとの差があまり見られず、飼い犬が示す独占的行動には、オーナーから飼い犬への愛着度は影響を与えていないと考えられた。オーナーは本研究にボランティアとして参加しており、飼い犬に対する関心や愛着がある程度高く、飼い犬への愛着が高く評価されたと考えられる。

一方で、飼い犬からオーナーへの愛着度には個体差が見られ、オーナーの飼い犬への日常的な接し方や飼い犬との関係には、実は差異があるのではないかと考えられた。本研究で用いた質問紙におけるオーナーから飼い犬への愛着度の尺度には、オーナーがどのような飼育態度をそれぞれの飼い犬の行動に対して示すのか、といった点を尋ねる項目数が少なく、オーナーの飼育態度が個別の飼い犬ごとに異なっていなかったかどうか検討できていない。また、飼い犬への接し方を愛着度として測定したが、飼い犬に対する意識（例：飼い犬は自分にとって何よりも大切だと思う等）は測定しなかった。オーナーの飼い犬に対する意識が異なれば、それが飼い犬に対する飼育態度へ繋がり、飼い犬のオーナーに対する愛着度に個体差が生まれた理由となり得ただろう。

オーナーと飼い犬の日常的な関係は、今回着目した愛着も含め様々な形が考えられる。本研究では、様々な関係の中の愛着という１つの要素が、生起する独占的行動の種類数に影響を与えることが示唆されたが、オーナーと飼い犬の日常的な関係で現れる他の要素も、独占的行動に影響を与えるのではないかと考えられる。要素の１つには、飼い犬がどの程度オーナーの動きを気にしているのかという度合いである「関心度」が考えられる。「関心度」が高いということは飼い犬がオーナーの動きなどを気にする度合いが高いことを示し、オーナーが同居犬のみに関心を向けかま

うなどの行為をした時には、自身へ関心を戻そうとする独占的行動が増えるのではないかと考えられる。逆に「関心度」が低ければ、オーナーが自分に関心を向けていないという状況が気にならないため、オーナーが同居犬をかまっていたとしても、独占的行動を起こしにくいだろう。今後、オーナーと飼い犬の日常的な関係のどのような要素が独占的行動の生起に影響を与えるのか検討することによって、独占的行動を生起させる原因を明らかにし、この問題行動を抑制する手がかりを得ていきたい。

【引用文献】

S. Coren（2006），*Why Does My Dog Act That Way？ A Complete Guide to Your Dog's Personality*．New York：FREE PRESS.
（木村博江（訳）（2008）．*理想の犬の育て方*．東京：株式会社文藝春秋.）

平岩米吉（1976）．*犬の行動と心理*．東京：池田書店.

一般社団法人ペットフード協会．“全国犬猫飼育実態調査”．
＜http://www.petfood.or.jp/data/index.html＞（参照　2012-4-12）.

水越美奈（2007）．*なるほど！　犬の心理と行動*．東京：株式会社　西東社.

森浩治・佐藤真弓（2008）．*イヌの気持ちがよ～くわかる本*．東京：株式会社　秀和システム.

森裕司・奥野卓司編著（2008）．*ヒトと動物の関係学　第3巻　ペットと社会*．東京：株式会社岩波書店.

森裕司・武内ゆかり（2004）．*動物看護のための動物行動学*．東京：株式会社ファームプレス

太田匡彦（2011）．*犬を殺すのは誰か　ペット流通の闇*．東京：朝日新聞出版.

地球生物会議 ALIVE.“『全国動物行政アンケート結果報告書』（平成22年度版）”
＜http：//www.alive-net.net/index.html＞（参照　2012-8-20）.

J. Serpell（1995）．*The Domestic Dog*．New York：Cambridge University PRESS
（武部正美(訳)，森　裕司(監修)(1999)
犬：その進化，行動，人との関係．東京：株式会社チクサン出版社.）

米谷さくら（2010）．*イヌが飼い主に示す独占的行動とその対策、状況について*．北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科卒業研究.

【付録】　オーナーから飼い犬への愛着度の質問項目と愛着度の高さ

質問項目	回答項目	分類
あなたが飼い犬と同じ部屋にいてくつろいでいるとき、飼い犬とどのように接していますか？	1．ほとんどかまうことはない（視界に入っている程度）	L
	2．近くには来るがとくにかまうことはない	L
	3．横に来たらなでる程度	M
	4．自分から飼い犬に近づいてなでる	H
	5．たまに話しかけたり、なでたりする時がある	M
	6．よく話しかけるし、常にくっついてなでたりかまっている（どちらかのみも含む）	H
あなたが夜眠るとき、飼い犬とどのように接していますか？	1．眠るときは家族の寝室以外のゲージに入れる	L
	2．家族の寝室以外に野放しにしておく	L
	3．眠るときは家族の寝室のゲージに入れる	M
	4．同じ部屋で眠るが、布団にはいれない（布団の上に乗せない）	M
	5．近づいてきたら布団に入れる（布団の上に乗せる）	H
	6．眠るときは必ず布団に入れる（布団の上に乗せる）	H
あなたが飼い犬と遊ぶとき、飼い犬とどのように接していますか？	1．全く遊ばない	L
	2．飼い犬がおもちゃを持ってきたら遊ぶ時がある	M
	3．飼い犬がおもちゃを持ってきたら必ず遊ぶ	H
	4．自分から飼い犬を遊びに誘う時がある	M
	5．いつも自分から飼い犬を遊びに誘う	H
	6．自分から誘う時もあれば、飼い犬から誘われる時もある	M
あなたは飼い犬によく話しかけますか？	1．全く話しかけない	L
	2．あまり話しかけない	L
	3．たまに話しかける	M
	4．頻繁に話しかける	H
	5．わからない	O
散歩にはよく一緒にいきますか。	1．全く行かない	L
	2．あまり行かない	L
	3．たまに行く	M
	4．頻繁に行く	H
	5．わからない	O
飼い犬に何かを要求されたとき、あなたはその要求に答えようとしますか。	1．全く答えない	L
	2．あまり答えない	L
	3．たまに答える	M
	4．頻繁に答える	H
	5．わからない	O

飼い犬からオーナーへの愛着度の質問項目と愛着度の高さ

質問項目	回答項目	分類
あなたが帰宅したときの飼い犬の反応について、1～5のうち当てはまるものを1つ選んでください。	1．まったくあなたには興味を示さない	L
	2．あなたの方を見てはいるが、近くに寄っては来ない	L
	3．そばまでは来るが、飛びついたりはしてこない	M
	4．そばまで来て吠えるが、飛びついたりはしてこない	M
	5．そばまできて飛びついたり、吠えたり、抱っこを要求して来る	H
あなたが家の中で移動するときの飼い犬の行動について、1～8のうち当てはまるものを1つ選んでください。	1．あなたが何をしていても気にしない	L
	2．あなたが動くとそれを見ていることがある	L
	3．あなたが移動すると、しばらくしてから追いかけて来る	M
	4．あなたが移動するとき、すぐに追いかけて来る	H
	5．あなたが移動するときはどこにでも付いて来る	H
	6．あなた以外の家族のときは、追いかけることがある	M
	7．あなた以外の家族のときは、いつも追いかける	H
	8．あなた以外の家族のときも、追いかけたりはしない	L
あなたが家の中でのんびりしているときの飼い犬の行動について、1～6のうち当てはまるものを1つ選んでください。	1．あなたとは別の部屋にいる	L
	2．あなたと同じ部屋にいるが、近くにはいない	L
	3．あなたと同じ部屋にいて、そばにはいる	M
	4．あなたと同じ部屋にいて、たまにくっついて来る	M
	5．あなたと同じ部屋にいて、常にくっついて来る	H
	6．あなたと同じ部屋にいて、あなたに乗っかって来る	H
飼い犬があなたを遊びに誘って来る様子について、1～6のうち当てはまるものを1つ選んでください。	1．全く誘ってこない	L
	2．あまり誘ってこない	L
	3．たまに誘って来る	M
	4．頻繁に誘って来る	H
	5．自分以外の家族は誘っているようだ	M
飼い犬があなたへ散歩に行きたいと訴える様子について、1～6のうち当てはまるものを1つ選んでください。	1．全く訴えてこない	L
	2．あまり訴えてこない	L
	3．たまに訴えて来る	M
	4．頻繁に訴えて来る	H
	5．あなた以外の家族には訴えているようだ	M